まに成て、或物くわぬ日などかき、又これぞあれはよくくふ日などかきたり、此女房やうかはるこよみかなとはおもへども、いとかうほどには思ひよらず、さることにこそと思ひて、そのまゝにたがへず、またある日、はこすべからずとかきたれば、いかにとはおもへども、さこそあらめとて念じて過す程に、ながくゐ日のやうにはこすべからず〳〵とつゞけかきたれば、二日三日までは、ねんじゐたるほどに、大かたたゆべきやうもなければ、左右の手にて去りをかゝへていかにせん〳〵とよぢりすぢりするほどに、ものもおぼえずしてありけるとか、

〔好古日録本〕古暦本（國字片假名　活字）

諸家ニ、古暦ノ傳ル者、皆具注暦也、國字暦ハ貞應二年癸未暦日アリ、長暦ヲ以考ルニ、月ノ奇偶異同アリ、其體中段ハ今ト同ジ、下段遠くゆかず、かみほとけよし、ゆめかたらずノ類、今ト同ジカラズ、但げふく（元服）はせん（八專）ノ類、當時古詞ノ存スルコトヲミルベシ、

貞應二年癸未假名暦日

六月大	あり
一日みずのえさる	のぞく（かみよし　ゆあぶるもよし）
二日みづのとのとり	みつ（めち日）
三日きのえいぬ	たいら（ほとけよし　むこどりわたまし　ありきよし　げふくよし　ざうさくかまぬるもよし）
四日きのとのゐ	さだむ（ゆあぶるもよし　ゐんたい日　ちこ日）
五日ひのえね	とる（かん日）
六日ひのとうし	やぶる（どようにいる　かみほとけよし、ゆめかたらず、ものたつよし　あしのつめよし）
七日つちのえとら	あやぶむ（ほとけよし　やまひみす　ふく日）